

第143回 三方限古典塾 ('18, 9, 20)

「南洲翁手抄言志録」(その2)

- 4 およ 凡そ事を作すには、^な須らく天に^{すべか}事ふるの心あるを要すべし。人に示すの念あるを要せず。^{つか}
(録-3)

(意識) どのような事でもそれを為すに当たっては、当然のことながら、天(神・仏)に仕える心を持つことが必要である。人に見せるような衒いの気持があってはならない。

(余説) 南洲遺訓 25 は、これがヒントになったのかも知れません。人には知られないことであっても「天(神・仏)にはお見通し」だというのは、全ての宗教の精髓です。

運動の法則や万有引力の法則など科学史上最大の功績を残したニュートンにとって「神の存在」は極めて重要であり、神学の研究にも没頭しています。人知を超えた天の存在を認めることが、人を謙虚でかつ創造的なものにさせるものだと思います。

西郷どんにとっては、主君斉彬公は神格化され天に近い存在だったのかも知れません。

(参考) 南洲遺訓 25 「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己れを尽して人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」

言志壘録 106 「自ら欺^{あざむ}かず。之れを天に事^{つか}うと謂う」

楊震四知の戒「天知る、神知る、子知る、私知る」 詩経「屋漏^{おくろう}に愧^はじず」

宋名臣言行録 「人の知らんことを求むること無れ」 大学「君子は独りを慎む」

- 5 憤^{ふん}の一字、是れ進學^{しんがく}の機關^{きかん}なり。舜^{しゆん}何人ぞや。予^{われ}何人ぞや。方^{まさ}に是れ憤。
(録-5)

(意識) 発憤するの憤の1字は、学問を進めるために最も必要な原動力である。(孔門十哲の首位である顔淵^{がんえん}が)「聖天子と言われる虞の舜^{しゆん}も自分と同じ人間ではないか。」(成らんとする志さえあれば、自分だって舜のような人物になれるぞ)と言ったことは、まさに憤^{ふん}ということである。

(余説) 「俺はなれる」と思うか、「俺にはとてもなれない」と思うかは、人間一生の分岐点にもなります。西郷どんは紆余曲折を経て、「幕府の世を終わりにさせ、天子が治める世に変える」という憤^{ふん}の原動力で「薩長同盟」や「大政奉還」「江戸城無血開城」、最後に「明治維新」「廃藩置県」という、超難題を成し遂げたのだと思われます。

しかしながら、すべてには「時」があります。物事には「啐啄同時」つまりタイミングが欠かせないことは、幕末から維新の歴史で数多くの過程でも教えています。

さらに、人には持って生まれた器というものがあり、「為せば成る」という信念も、とんでもない思い上がりになることもあります。その辺りを柔軟で適切な見極めができるのが、成熟した大人の見識というものではないでしょうか。

(参考) 論語・述而 8 「憤せずんば啓^{ひら}かず、排^ひせざれば発^{おこ}さず。」

(情熱がないものは進歩しない。苦しんだあとでなければ上達がない。)

村田清風(吉田松陰の師)

「来てみれば さほどでもなし 富士の山 釈迦も孔子も かくやありなん」

6 眼を著くこと高ければ、則ち理を見て岐せず。

(録-88)

[評] 三條公は、西三條、東久世諸公と長門に走る。之を七卿脱走と謂ふ。幕府之を宰府に竄す。既にして七卿が勤王の士を募り國家を亂さんとするを憂へ、浪華に幽するの議あり。南洲等力めて之を拒ぎ、事終に熄む。南洲人に語って曰ふ、七卿中他日關白に任ぜらるる者は、必三條公ならんと。果して然りき。

(意訳) 大所高所に眼をつけるように心がけると、物事のあるべき正しい道筋が見えてきて、迷うことなく決断できる。

(余説) 1867年の將軍慶喜による大政奉還後に起きた「王政復古」のクーデターこそ、大所高所に眼をつけられた西郷どんならではの。視点を高く置くと、それまで見えなかったものが見えてきます。その能力は、西郷どんが幾たびかの死線を乗り越えた結果、身についたものと思います。高い山に登ること視野を高くすることです。

七卿脱走は今で言う「七卿落ち」です。1863年に尊王攘夷派の長州藩と対立する公武合体派の薩摩藩がクーデターを起こして朝廷の権力を掌握し、尊王攘夷派の公卿が長州へ落ち延びた事件です。三條実美は維新後、太政大臣や内大臣に任ぜられました。

(参考) 思考の三原則「目先に捉われないで、できるだけ長い眼で見ること。物事の一面に捉われないで、できるだけ多面的に・全面的に見ること。枝葉末節に捉われないで、根本的に見ること。」(致知出版社・安岡正篤一日一言 111p)

7 性は同じうして而して質は異なる。質異なるは教の由って設けらるゝ所なり。性同じきは教の由って立つ所なり。

(録-99)

(意訳) 人間の本性は誰でも同じであるが、気質はそれぞれに異なる。気質の異なるところが、教育が必要とされる理由である。そして、本性が同じであることが、教育に効果を期待しうる理由である。

(余説) 儒学では「性」は人間の持って生まれた本性、「質」は性格、又はその基礎となる気質を言います。朱子学では「性即理」を主張して、本然の性こそが天地万物を主宰する法則、つまり天理であるとし、一方、陽明学では「心則理」を主張し、性と情を含めて天理であるとし、他人の痛みは自分の痛みという「万物一体の仁」となります。

孟子は、「人皆、人に忍びざるの心あり」(人には誰でも、人の悲みを見過ごすことのできない同情心がある)として、「惻隱」(哀れむ心)、「羞惡」(恥を惡む心)、「辭讓」(謙虚な心)、「是非」(善惡の区別)は、仁・義・礼・智の糸口(四端)であり、その「四端」の情がないのは「人に非ざるなり」と書いています。(公孫丑章句・上)

西郷どんの日本史を大きく変えた功績は、陽明学と「人は善なるもの」と見る思想に裏付けされています。また、本性は同じ善であったはずのかつての同志が、新政府の高官になると、権勢欲などにまみれる醜態が見るに堪えず、故郷へ帰る悲しみも味わいました。

薩摩藩英国留学生の一人で、戊辰戦争や北海道開発に貢献した、村橋久成も同じ思いから僧になって放浪し、最後は神戸で行き倒れました。人の「質」が持つ悲しさです。

(参考) 論語・陽貨「性相近し。習い相遠し」(生まれつきは似たもの、習慣で変わる)